

ロレンスの季節感

‘Purple Anemones’ と ‘Bavarian Gentians’ をめぐって

古 我 正 和

ロレンスはどのような季節感を持っていたのだろうか。ロレンスにとって四季のめぐりとは何だったのだろうか。そしてそれは花とどんな関係を持っていたのだろうか。花の詩を読んでいると、ロレンスがいかに季節というものに敏感であったかが感じとられる。ここでは彼の二つの詩を通してそのことを検証してみたいと思う。

まず春を歌う詩「紫のアネモネ」(‘Purple Anemones’)である。アネモネはもともとアジアの原産であったものがギリシアから西ヨーロッパに伝わった。従ってその語源は wind-flower を意味するギリシア語の *ἄνεμος* からラテン語の *anemônê* となった。色は種々あるがイギリスには、この詩に歌われる紫系統のものとしては wood anemone とも呼ばれている白色に薄い紅と紫を帯びたものがある。英文学の中ではこの花がほとんどギリシアの美少年アドーニスの伝説に影響されているのは、この色のためであろう。アドーニスが狩りに出て傷ついて死んだ時、美の女神ヴィーナスがアドーニスの血に自分の涙を加えて花を染めたと言われているからである。しかしロレンスのこの詩は違って、アドーニスとは無関係である。

この詩は問答の形式でなされる。最初に春にこの世に花をもたらししてくれたのは誰なのか、天国の神なのかと尋ねられる。

Who gave us flowers?
Heavens? The white God?⁽¹⁾

上の white God とは一体どのような神であろうか。この white は次に出てくる地獄の闇 (dark) と対照して用いられている言葉であろう。従って太陽神ア

ポロを考えていると思われる。ところがこの間に対する返事は、まったく予期せぬものである。

Nonsense!

Up out of hell,

Fron Hades!

5

(2)
Infernal Dis!

この世に花をもたらすものは、天の恵みでもなく有り難い神様でもキリストでもなくて、地獄の底に住む冥府の神ディス (Dis) であって、花はそのもとから地上へ上がって来て咲くのだと言うのである。同じ死にまつわるものであっても、美少年アドーニスに対するヴィーナスの哀れみと嫉妬深い冥府の神ディスとは大きな違いがある。

ディスとはローマ神話の呼び方で、ギリシャ神話ではプルートーと呼ばれる下界の王である。そしてここでわれわれに思い浮かぶのは、シシリー島のエンナ (Enna) の草原で花を摘んでいたペルセポネ (Persephone) を奪い去っていった自分の妻としたのが、他ならぬこのプルートーであったことである。

この詩が書かれたのはタオルミーナ (Taormina) であることは詩の最後の地名の記入で分かる。そしてタオルミーナはシシリー島にある。ロレンスがこの詩を書いた時、その島の中央部の高原の都市エンナでのペルセポネの言い伝えと、その都市がギリシャ以前からペルセポネの母セレス (Ceres) とペルセポネの信仰の中心地となっていたことを、ロレンスは当然知っていた。また母のセレスはプルートーに自分の娘を与える条件として、1年の三分の一は下界で暮らしても良いが、残りの三分の二は地上で母と共に暮らすよう言ったと伝えられている。そこからエンナの草原とは、永遠に春の季節が支配する所とされているのである。

ペルセポネはギリシャ神話でゼウスと地母神ディミターとの間の娘であったが、下界の神プルートーにそそのかされてその妻となり、春から秋にかけて地上で暮らし、冬は地下でプルートーと共に暮らす運命となっていた。

春先にプルートーはペルセポネに次のように言う。

⁽³⁾
Go then, he said.

22

「では行くがよい」とプルートーが言うのは、妻のペルセポネに一年のうち地上で母と共に暮らすことを許す時のことである。そして彼女が地上へ出た時、ついてきた地獄の番犬たちが花となって咲いたという。後の方ではクローカスは頬に縞のあるホイットベッドの子犬から、またスパニエル犬から水仙が咲き出したと述べられている。そしてこれらの花に、ペルセポネとその母親の監視をプルートーが命じるのは、次の文で分かる。

Aha, the stripe-cheeked whelps, whippet-slim crocuses,

At'em, boys, at'em!

Ho, golden-spaniel, sweet alert narcissus,

50

⁽⁴⁾
Smell'em, smell'em out!

春と共にペルセポネが地上へ上ってくるのは彼女が春を呼ぶためであり、彼女が地上へ現れる季節である春に花が地上に咲くことを、このように考えたのである。

And in Sicily, on the meadows of Enna,

She thought she had left him;

But opened around her purple anemones,

25

Caverns,

Little hells of colour, caves of darkness,

Hell, risen in pursuit of her; royal, sumptuous

Pit-falls.

All at her feet

30

Hell opening;

At her white ankles

⁽⁵⁾
Hell rearing its husband-splendid, serpent heads,

彼女はシシリーのエンナの草原で彼から逃げおおせたと思ったが、その時彼女の紫のアネモネの周りに小さな地獄の洞穴ができた。彼女のすぐ足元で地獄が開いてゆき、地獄は亭主の自信に輝く蛇の頭をもたげて、彼女を捕らえようとする。

Ah mastery!

Hell's husband-blossoms

(6)

Out on earth again.

男たる亭主の強大な支配権が、地上で再び花を咲かせる。それが「紫のアネモネ」だというのである。その美しい花の周りには、毒草のトリカブトが地獄の魅力にあふれて今解放されたばかりの平原を包囲していると、次のようにロレンスは歌う。

Look out, Persephone!

40

You, Madame Ceres, mind yourself, the enemy is upon you,

About your feet spontaneous aconite,

Hell-glamorous, and purple husband-tyranny

(7)

Enveloping your late-enfranchised plains.

ペルセポネの母親セレスは自分の娘がたとえ一年の一部分でも逃げおおせたと思ったのは間違いで、その嫉妬深い地獄の王は地上へ、自分の妻に付きまといてやって来る。

Hell is up!

(8)

Hell on earth, and Dis within the depths!

ではこれほど嫉妬深いプルートーが、何故彼女を地獄から地上へ行かせたのだろうか。これに対する言葉から、ロレンスの季節感や春の考え、また同時に人間観がうかがわれる。

To track her down;

60

All the sport of summer and spring, and flowers snapping

at her ankles and catching her by the hair!

(9)

Poor Persephone and her rights for women.

プルートーが妻を地上へ送るのは、地上へ戻った彼女を追って春と夏のあらゆる楽しみに耽るためだという。そして花となったプルートーは、彼女のくるぶしに噛み付き彼女の髪の毛をもてあそぶ。

春には美しい花が咲き新しい命が息吹き、生の営みが展開する。枯渇しそうになった暗い地下の冬枯れの地獄から、生命がよみがえるのである。母親にとっては自分の養育した娘はいつまでも自分の愛児であり、ましてこのように地獄の罠にかかった娘であってみれば、最初の約束とはいえもう夫のところへ帰したくない。ところが地獄の夫は、

(10)

The bit of husband-tilth she is.

娘は自分が耕作した一部だと夫たるものの権利を主張するのである。そしてロレンスは次のように歌ってこの詩を結ぶ。

Poor mother-in-law!

They were always sold.

70

(11)

It is spring.

「裏切られる」(were...sold)と言ったのは、楽しい春と夏を経て冬枯れること、すなわち苦しい育児によってやっと育てた子が、毎年秋になると繰り返行われる結婚で奪い取られるという、一年のめぐりを示すのである。これこそが「冬枯れ」の意味するところである。アネモネの花を従来のようにヴィーナスとアドーニスの物語でなく、ペルセポネとプルートーとにまつわる話にしたことの中に、ロレンス独特の死生感と季節感が見いだされる。

もう一つはリンドウの詩である。リンドウの詩が生まれるいきさつは次の通りであった。ロレンスは1912年5月3日、チャリング・クロス駅で恋人フリーダ(Frieda)とおちあい、フリーダの両親が住んでいたメッツへと出発する。

この町はフランス北東部のアルザス・ロレーヌ地方にあり、当時ドイツ領であった。フリーダの父親（Friedrich von Richthofen 男爵）はかつてプロシヤの軍人であり、フランス・プロシヤ戦争で負傷したが、当時はアルザス・ロレーヌの知事であった。後に第一次世界大戦の前にはメッツ市長にもなった格式のある有力者であった彼が、この時、一炭坑夫の息子でもの書きとの恋を娘に許すはずもなかった。ロレンスはホテルや友人宅を転々とした後、5月24日ミュンヘンでフリーダとおちあい、その近郊にある社会学者アルフレッド・ウェバー（Alfred Weber）の山荘で6月から2か月間、新生活を過ごす。詩集『見よ、我らは勝ち抜いた』（*Look! We Have Come Through*）の四分の一がここで生活から生まれた。そして8月初旬、アルプス越えの徒歩旅行に二人は出発するのである。

「バヴァリアのリンドウ」（'Bavarian Gentians'）という詩が生まれたのはこの時である。フリーダはその手記『私でなくて風が……』（'Not I, But the wind...'）の中で次のように書いている。

When Lawrence first found a gentian, a big single blue one, I remember feeling as if he had a strange communion with it, as if the gentian yielded up its blueness, its very essence, to him. Everything he met had the newness of a creation just that moment come into being.⁽¹²⁾

リンドウの花は日本でも良く見かけるものである。日本では小さくて二つ以上群れをなしているのがよく見られるが、ロレンスはこの時バヴァリア地方で大きなのが一輪咲いているのを見たようである。そしてその時、そのリンドウが青色をした、いかにも物の精髓とも言えるものを新しく創造して彼に投げ掛けているかのように、ロレンスはその花と不思議な精神的交流をしているとフリーダは感じるのである。

リンドウは9月29日のミカエル祭の頃に咲く花であるが、この時ロレンスに大きな感動を与えたそのリンドウはどのように歌われただろうか。

Bavarian gentians, tall and dark, but dark

darkening the daytime torch-like
 with the smoking blueness of Pluto's gloom,
 ribbed hellish flowers erect,
 with their blaze of darkness spread blue, 5
 blown flat into points, by the heavy white draught of the day. (13)

バヴァリア・リンドウは、我が国のものとは違って背が高く見るからに暗い感じを与える。この詩でもロレンスは前の詩と同じく、リンドウの醸し出す闇の感じをペルセポネの悲しい運命をからませて歌う。花を咲かせるものは地獄に住む冥府の神だと前の詩で歌ったことが、そのままここでも起こるのである。

上の「プルートーの暗やみの煙る青さ」(the smoking blueness of Pluto's gloom) は、プルートーと一体となったペルセポネの宿命を表している。

Torch-flowers of the blue-smoking darkness, Pluto's dark-blue blaze
 black lamps from the halls of Dis, smoking dark blue
 giving off darkness, blue darkness, upon Demeter's yellow-pale day
 whom have you come for, here in the white-cast day? 10 (14)

デイスは前に述べたようにプルートーのローマ神話での名前である。プルートーの闇の世界と、ペルセポネの母デミーターの薄黄色の昼間(yellow-pale day)とは鮮やかな対照を示す。

Reach me a gentian, give me a torch!
 let me guide myself with the blue, forked torch of a flower
 down the darker and darker stairs, where blue is darkened on blueness
 down the way Persephone goes, just now, in first-frosted September,
 to the sightless realm where darkness married to dark 15
 and Persephone herself but a voice, as a bride,
 a gloom invisible enfolded in the deeper dark
 of the arms of Pluto as he lavishes her once again
 and pierces her once more with his passion of the utter dark

among the splendour of black-blue torches, shedding fathomless darkness
on the nuptials.⁽¹⁵⁾

20

ここで松明 (torch) の意味がはっきりしてくる。上の 4 行目と 7 行目にも出ているが、11 行目で、闇の中での道案内のためだと分かる。自分自身でプルートの世界まで松明を持って降りて行くのである。初霜が降りる 9 月に、ペルセボネが通った道を降りて行くのである。そこでは毎年 9 月に暗がりの中で改めてペルセボネとプルートとの婚礼が行われるのだ。

Give me a flower on a tall stem, and three dark flames,
for I will go to the wedding, and be wedding-guest
at the marriage of the living dark.⁽¹⁶⁾

リンドウの花を見ていると、地下で 9 月に行われるその婚礼に列席したくなるという。リンドウのあの暗い感じを、冬には地獄へと帰らねばならない運命を背負ったペルセボネの暗さにたとえているのである。秋の悲しさ、秋の移り変わりを覚えさせる。ロレンスの季節感を感じさせる詩である。

ロレンスはこの時バヴァリアのリンドウを見て、プルートとペルセボネの物語を思い、うっとりとなっていたのである。フリーダが見たのはそのロレンスの姿であった。

ロレンスの草花や自然描写に接する時、何か豊かなものが感じられるのは、その背後にこのような季節感があるからであろう。

註

- (1) Vivan de Sola Pinto and Warren Roberts (ed.). *The Complete Poems of D.H. Lawrence*. London: Heinemann, 1972. Vol. 1. p. 307.
- (2) *Loc. cit.*
- (3) *Ibid.*, p. 308.
- (4) *Ibid.*, p. 309.
- (5), (6), (7) *Ibid.*, p. 308.

(8), (9), (10), (11) *Ibid.*, p. 309.

(12) Frieda Lawrence. "*Not I, But The Wind...*". London & Toronto: Heinemann, 1935.
p. 33.

(13), (14), (15), (16) *The Complete Poems. op.cit.* p. 975.